
コードギアス ギアスクエスト

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス ギアスクエスト

【Nコード】

N7962R

【作者名】

キリ

【あらすじ】

「枢木よお、死んでしまうとは情けない……！」

「え？」

気がつくとき、スザクは豪華な広間に立っていた。

ムシヤクシヤして勢いで書いたギアスのアナザーストーリー。スザク主人公のファンタジーです。

旅立ちの章

「柩木よお、死んでしまうとは情けない……！」

「え？」

気がつくのと、スザクは豪奢な広間に立っていた。

「ここつて、まさか……」

見た覚えのあるその場所は、神聖ブリタニア帝国首都、皇宮ペンドラゴン。その、玉座の間である。

「いや、でもそんなはずは……」

この場所は、シュナイゼルが空中要塞ダモクレスによるフレイヤの一撃によって、消滅したはずであった。それどころか、目の前にいる人物　玉座に悠然と腰掛けている人物は、この世界で消え去ったはずのシャルル・ジ・ブリタニアではないか。

「一体、何が起こっているんだ？」

思わず自分の頬をつねる。

「……痛い」

夢じゃないのか。それとも自分は本当に死んでしまったのだろうか。覚えてはいないが。

「何をしておる。早く魔王の手から我が姫を救い出してこぬか」

「姫？　魔王？」

「そうだ。我が娘であるユーフェミアを魔王の手から救い出してくるのが、勇者たる貴様のやるべきことであろうがぁ」

「ユフィ……！」

いるのか、ユフィもっ！

「て、勇者？」

一体何が何だかわからない。ここは本当にブリタニアなのか？

「ふうむ。しかしまあ、貴様ひとりに任せると、また死んでしまうおそれがあるからな。少し助言をしてやろう。城を出てすぐ右の酒場で仲間を集めよ」

それだけ言うと、両脇に控えていた衛兵に命じて、スザクを玉座の間から引き摺り出す。

「え？ ちょっ……」

ボタンと扉が閉じられる。再び扉を開けようとするも、どういったわけか、スザクの勢力をもってしても扉を開くことはかなわなかった。

……一体何なんだ？

スザクはとりあえず言われた通りに、城を出てすぐの酒場へと向かった。

「アツシュフォードの酒場へ、ようこそー」

「生徒会長？」

元気に出迎えたのは、こんなところにいるはずのない人物、ミレイ・アツシュフォードだった。

「あれ？ スザクじゃなか。なにに、仲間でも探しにきたの？」

ウェイター姿のリヴァル・カルデモンドが、スザクの肩に腕を回してそう笑いかけた。

「えっ、いや、まあ……」

「だったらいいのいるよお。最近入った新人なんだけどさあ」

リヴァルが示した先には、背の高い金髪の男と、髪をアップにした小柄な少女の姿。

「ジノにアーニヤ……」

「よお、スザク。俺達に何かようか？」

「……仲間？」

ジノ・ヴァインベルグとアーニヤ・アールストレイムがスザクの前へとやってくる。

「ジノはともかく、アーニヤ、君のその格好……」

アーニヤは鰐広のトンがり帽子に、マントを羽織っている。その

姿は、さながら某エロゲーの軍師のコスプレだ。

「魔法使い、だから」

「魔法使いって……」

本当に一体全体、この世界はなんなのだろうか。

わけがわからないまま、スザクは本編同様流されていく。

何はともあれ、スザクは騎士と魔法使いの仲間を手に入れたのであった。

「とりあえずあれだな。まずは武器屋だろう」

ジノの言葉に、スザクは頷く。

もう何が何だかわからなかったが、とりあえずユーフェミアは助きたい。そのために魔王というヤツを倒さないといけないのである。は、そのための武器は必要だろう。

「だったらあっち」

アーニヤが手にした曲がった金属棒（ダウジング棒）の開いた方向を示す。そこには、一台のトレーラーハウスが停まっていた。

「まさか……」

「オメデトー！」

「ようこそいらっしやいました。ゆっくりしてって下さいね」

三人を出迎えたのは、やはりというかなんというか、ロイド・アスブルンドとセシル・クルーミーであった。

「あの、剣とか欲しいんですけど……」

「いいのあるよお」

そういつてロイドが奥から出してきたのは、鈍色の輝きを放つ片手剣。

「アロンドイトっていうんだけどね。刃こぼれしにくいことで有名なんだよ?」

「えーっと、じゃあそれで」

特に深く考えることなく、スザクはそれを受け取る。どちらかというと、早くこの場を離れたいスザクであった。その間に、二人もセシルから武器を受け取る。ジノは両手剣を、アーニヤは杖を手に入れていた。

「今なら特別に君らの身体も改造してあげるけど、どうするう?」

「「「お断りします」」」

声を揃えてそう言つと、「あ、そ」とロイドは拗ねたようにそっぽを向き、それから意地の悪い笑みを浮かべ、

「じゃあその武器の料金なんだけど、大体一千万円ってとこかな? 君たちに払える? もし改造させてくれるのならその武器の料金をタダにしてあげても……」

「……ロイードーさん!」

ロイドの背後には般若の如き表情を浮かべたセシル。

「あ、ゴメンナサ……」

ロイドの悲鳴を背にして、三人は一路魔王城へと向かうべく旅立つのであった。

旅立ちの章（後書き）

つづく？

好敵手の章

「さて、魔王城への行き方だが。まず船に乗って、魔王城のある蓬萊島に向かわないとな」

「道中魔王配下の敵が襲ってくるから、気を付けしないと」

二人はそう言ってスザクのあとを一行でついてくる。

「二人とも説明ありがとう……。さて、それじゃあ、まずは自分たちで動かせる船を探さないといけないわけだね」

ブリタニアの首都ペンドラゴンは、内陸部にある。沿海部まで歩いて向かうとすると、どれほどの時間がかかるか。

「さて、どうしたものか……」

スザクは腕組みし、首をかしげる。その肩をポンポンと叩くものがいた。

「乗り物なら、ある」

アーニヤが示した先には、観光地にあるような三人乗りの自転車。……これかい？」

全身で乗りたいアピールをしているアーニヤに対し、どう断るべきかジノの顔を伺うと、彼は両手を挙げて首を横に振った。

その港町までたどり着いたのは、およそ三日後のことであった。自転車は金属疲労をおこし、タイヤはこれでもかとすり減っている。余談ではあるが、彼ら三人のこぐ自転車は時速180kmをマークし、世界記録を軽く塗り替えている。魔王配下の敵も、襲いかかるどころではなかった。

「……ということで、船を探さないといけないわけだけど」

「とりあえず腹ごしらえだな」

「お腹、減った」

三人で買い食いをしながら市場を練り歩く。するとそこへ、大きな怒声が響いた。

「おうおう、俺を誰だと思ってやがんだア？ 泣く子も黙る魔王軍、黒の騎士団の玉城さまだぞオ！」

何事かとその声の方へ向かうと、すでに人垣ができており、そこへスザクは身体をねじ込むようにして内側の様子を伺う。そこにはチンピラが因縁をふっかけるように恫喝する男の姿と、真っ向から対立するように肩を怒らせた少女 シャーリーの姿があった。

「知らないわよ、そんなの！ それより商品弁償しなさいよ！」

シャーリーの言葉に、見れば足元に踏みつけられた跡の残る商品と思しき花束があった。

「ああん？ 知らねーよ！ テメエが落とすから悪いんだろぅがよオ！」

そう言つてシャーリーにつかみかかろうとするチンピラ玉城。スザクは素早く躍り出ると、その腕を捻るようになってつかんだ。

「うおいちちち……！ 何だテメエはコラア！」

「やめろ、相手は女性だぞ！」

「テメエ、俺を誰だと思つてやがる！」

玉城が涙目で訴えたその時、

「魔王軍だろ？ じゃあ倒してしまつて問題ないな」

人垣の中からジノとアーニヤが不敵な笑顔を浮かべ、ゆっくりと近づいてくる。

すると、それを阻むように一本の剣が地面に突き刺さった。

「むっ……」

ジノとアーニヤが足を止める。その場にいる全員が剣の飛来した方へと視線を向けた。

「そこまでにしときな！」

そこにいたのは、無駄にエロい格好をした赤毛の女戦士、紅月カレンの姿。

「か、カレン……！」

「そうさ、あたしの名は紅月カレン。黒の騎士団零番隊長であり魔王ゼロの一番の腹心、紅月カレンさまだ！」

黒の騎士団に、魔王ゼロ。そうなるとやはり魔王の正体は……。スザクは頭が痛くなる。

「カレン！ 助けに来てくれたのか！」

玉城が叫ぶ。しかし、カレンはふんつと鼻を鳴らし、

「あんたみたいなバカ知らないよ。大体、掃除夫のあんたが偉そうに黒の騎士団名乗ってんじゃないよ！ あたしが用があるのは、この男さ」

そう言ってスザクを指さす。

「あんた、魔王討伐を企む勇者なんだってね。そうはさせないよ。あんたは今この場であたしが倒す！」

そういつて屋根の上から飛び降りスザクのもとへと一直線に駆け寄るカレンの腕には、鉄製の鉤爪が。

「くっ……！」

思わず後退り剣を構えるスザクに、さらに高速で鉤爪を振るうカレン。剣と鉤爪がぶつかり合う度に、激しい火花が二人の間に瞬く「スザク……！」

駆け寄ろうとするジノに対し、カレンが鉤爪を向けた。

「外野は黙ってな！ 輻射の波動！」

そういつた次の瞬間、ゴォッと炎が渦巻き、ジノを襲った。

「ジノ！」

「くっ、魔法戦士か！ アーニャ！」

ジノがアーニャの名前を叫ぶ。すでに集まっていた人たちは逃げ惑い、その周囲には誰もいなかった。

「わかってる。 ブレイズルミナス！」

アーニャの足元に複雑な魔方陣が浮かび上がる。

そうしてジノと炎との間に、透明な壁が現れた。

「へえ、やるじゃないか！」

カレンの意識がジノとアーニャの方へと向かうその一瞬の隙を、

スザクは見逃さなかった。

「うおおおおっ……！」

「なっ……！」

スザク必殺の突きを、カレンは鉤爪で受ける。しかし、鉤爪はその尖すぎる一撃に耐えることができず、ピシリと音を立てて砕けてしまった。

「チィ……油断した！」

大きく飛び退ると、カレンは砕けた鉤爪に視線を移す。

「これじゃあもう戦えないね。しょうがない、今回はあんたたちの勝ちにしといてやるよ」

そう言って身を翻すカレンを、スザクは黙ってみつめていた。

「……カレン、ここでも君は、僕の前に立ちふさがるのか」

好敵手の章（後書き）

つづくはず。

番外編 コードギアスAFTER：5でボツにした話

「君と話をするのは、初めてになるね」

品の良い面立ちにアルカイクスマイルを湛えつつ、シュナイゼルはさりげなく部屋中央のソファを示す。

それに従いストレートの長い髪の少女 C・C が素直に腰掛けると、シュナイゼルも向かい側のソファへと座り話の続きを始めた。

「ふむ。こうして実際に相對してみても、普通の女性とさして違いがあるようには見えないね。しかし、そうか……君がC・C か」

「その口振りからすると、私のことは知っているようだな」

「ある程度はね。コーネリアが調べたギアスについての情報はもちろん、クロヴィスの遺した情報も君という存在を理解する上で有益だったよ」

クロヴィス・ラ・ブリタニア。今は亡き神聖ブリタニア帝国第3皇子で、ルルーシュやシュナイゼルにとって腹違いの兄弟である。C・C はかつてエリア11の総督だった彼に捕らえられた際、その身を研究されたことがあったが、そのときの研究資料が残っていたのだろう。

「そうか。それなら話が早い。今回私がここにきた目的なんだが」

「さて」

C・C からその計画の全貌を説明される間、シュナイゼルは表情から笑みを絶やすことなく、ただ淡々と話を促していった。

そうして一通り説明を聞いた後、シュナイゼルは一言、それを口にする。

「やはり、彼は怖いね」

その言葉に、C・C が相槌を打つ。

「まあな。だが、こと神算鬼謀に関しては、お前も似たようなもの

だろう？」

「ああ、そういうことではなくて……」

シュナイゼルは口元を隠すように手で覆い、言葉を探すようにして続ける。

「ルルーシュは 彼は人の心の動きまでも戦略に組み入れてしま
う」

「どう違うんだ？ それはお前も同じことだろう？」

「似ているようで、全く違うさ。私は人の心を読むことは余り得意ではないんだ。相手の嗜好や行動パターンからいくつかの予測を立てはするけれどね。それらの予測をもとに、それぞれに対応する戦略を用意することはできる。しかし、ルルーシュは違う」

シュナイゼルは脚を組みかえ、さらに言葉が続けた。

「昔、彼とはよくチェスをしたものでね」

「ん？」

唐突な話題の転換に、C・Cは戸惑いの表情を見せる。

「まあ、チェスに限らず戦略性のあるゲームはどれもそうなんだが、そこにはある種打ち手の行動パターン 呼吸というものが存在する。その呼吸を乱すことがゲームの要ではあるんだが、ルルーシュの場合、相手の呼吸を読んだ上でさらにそれを利用する手を得意と
していてね」

「ああ、そういうことか」

「頑なに相手はこう来るであろうと信じるがゆえに、相手が自分の予測とは違った動きを見せると弱かったが、はまるとまず負けなかったね。ゲームに負けることこそなかったが、私は彼のそういった打ち筋を恐れると同時に、ひどく愛おしいと感じたものだよ」

「愛おしい？」

思いがけないその言葉に、C・Cが目を見張る。

シュナイゼルは両手を膝の上で組むと、どこか遠くを見るようにして言った。

「ルルーシュは 彼は、昔からナナリー以外には兄弟にさえ心を

開かない子でね。唯一例外だったのは、ユフィくらいなものかな」

血で血を洗う王宮の中にあつて、それは当然の帰結であつたのかもしれない。実際、ルルーシュやナナリーを忌み嫌う兄弟も数多く存在した。だが、少なくともシュナイゼルは、幼くも賢い弟のことが嫌いではなかった。

「そんな彼が、チェスの上では私の呼吸を読み、それを利用する手を打ってくるんだよ」

相手を理解して戦略を練るということは、ひいては相手を信頼するということに他ならない。

敵を倒すために敵を信頼する。誰も信じようとはしないルルーシュが、ゲーム上での事とはいえ自分を信じてくれることが、シュナイゼルには小気味よかった。

「少し、嬉しかったね」

「シュナイゼル、お前は」

C・C が何かを口にしかけ、しかしそれを否定するように頭を振ると、それを見てシュナイゼルはふっと息を吐いた。

「さて、少し話が長くなってしまったようだ。式典については了承した。他には何かあるのかな？」

「やけに素直に従うんだな」

「反対する理由などないさ。私はただ、ゼロに従うだけだよ」

C・C は席を立つと、足早に出入り口へと向かった。

そうして、部屋を出て行こうとしたC・Cの背中に、シュナイゼルが声をかける。

「ああ、そうそう。ルルーシュは信じないだろうけど、私は彼のことが好きだったよ」

部屋を出る際に見えたシュナイゼルの笑みが、偽りの仮面によるものかどうかC・Cには判らなかった。

番外編 コードギアスAFTER：5でボツにした話（後書き）

タイトルまんまです。

外付けHDD買ってパソコン整理してたら出てきたので、消す前に
ついでに晒そうかと。

SSも完結にしちゃったし、まあここでいいかな、っと。

仮面の章

「スザクが港町に現れたという情報は確かか」

黒い仮面の男ゼロは、魔王城たる斑鳩のブリッジまでやってくと、開口一番にそう言った。

それに対し、側に控えた黒の騎士団四天王のひとり、ジェレミア・ゴッドバルトがそれに答える。

「はい。確かなようで。今し方、紅月から連絡がございました。ヤツめと接触した折に、紅蓮の鉤爪が砕け、撤退したとのこと」

「そうか。捕縛はできなかったか。まあいい、チャンスはいくらでもある。こちらにユーフェミアというカードがある限り、ヤツはここを目指してくるはずだからな」

そのために彼女を攫ったのだから。

仮面の下で不敵な笑みを浮かべるゼロ。

「兄さん」

そんなゼロへと声をかけたのは、幼い顔立ちをした少年、ロロ・ランペルージであった。

「今度は僕に任せてよ。所詮カレンは四天王の中でも戦闘だけが取り柄のビッチさ。僕が必ずあいつを捕まえてみせるよ」

まるで忠犬のように瞳を輝かせるロロに対し、

「……いいだろう。行け、ロロ。スザクを、ヤツを私の前に引きずり出せ！」

ゼロは芝居掛かった仕草でマントを翻した。

「それにしても、本当にスザクがこの妙な世界を抜け出す鍵なんだろうな？」

執務室に戻ると、ゼロの仮面とマントを外し、ルルーシュはドックと深く椅子に腰を下ろした。

「おそろくな」

ルルーシュの問いに答えたのは、ソファに腰を下ろし、ピザにむしゃぶりついているピザ女　もとい、細身の美しい少女Ｃ・Ｃ・であつた。

「おそろくでは困るんだよ、おそろくでは」

「では言い換えよう。多分な」

「何も変わっていない！」

机に両手をついて苛立ちを表すルルーシュに、我関せずとピザを食べ続けるＣ・Ｃ・。

「……まあいい。それより」

ルルーシュが何かを言いかけた瞬間、電子音と共に自動ドアが開く。

「お待たせ、Ｃ・Ｃ・。新しいピザが焼けたわよ」

ドアの向こうから現れたのは、桃色の髪をした優しげな面立ちの少女、ユーフェミア・リ・ブリタニア。

「……って、何をしている、ユファイ!?」

「Ｃ・Ｃ・がピザを食べたいといっていたから。いけなかったかしら?」

ユーフェミアの手には、その言葉通り今焼けたばかりであろうピザが。その香ばしい香りに吸い寄せられるように、Ｃ・Ｃ・がユーフェミアのもとへと向かう。

「君は攫われたんだぞ、わかっているのか?」

「ええ、そうでしたね。すみません……」

ユーフェミアがシュンとうなだれる。

「むぐむぐ。……タラモピザか。白胡麻が使われていて、香ばしいな」

「そうでしょう?　隠し味にほんの少しサフランを……」

Ｃ・Ｃ・の言葉に、ユーフェミアが顔を輝かせる。

「はあ……」

ルルーシュはため息を吐くと、もう一度深く椅子に腰掛けるのだ。
った。

一方、枢木スザクを捕獲に向かった口口は、

「待ってて、兄さん。僕があいつを、スザクを殺してみせるからね」
やはり口口であった。

仮面の章（後書き）

喉が痛い。確実に風邪です。

船出の章

「本当にありがとうございました！」

シャーリーが頭を下げると、スザクは「とんでもない」と両手を前に突き出し首を横にふる。

「でもまあ、こんだけの騒ぎを起こしたら、蓬萊島まで船を出してくれるヤツなんていないかもなあ……」

ジノがそう言うと、シャーリーはバツと顔を上げ、

「蓬萊島まで行きたいんですか？　でしたら、私の友達に」

そこは港町にほど近い、鍾乳洞を利用した乾ドックだった。

わずかな照明のもと、収められた船の上に、ひとつの人影がある。「許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない、ユーフェミアさまを攫うなんて！　私の女神様！　助ける、助けて見せる、私が必ず」

それは、悪魔のような形相をしたニーナ・アインシュタインの姿だった。

「ニーナ」

そんなニーナに躊躇うことなくシャーリーは声をかける。

「何？　何しにきたの？」

カチャカチャと船を弄っていた手を止め、ニーナはシャーリーの方へと振り返った。

そこに、見たことのない三つの人影を見つけ、彼女は身をすくめ警戒する。

「誰？　誰なのそいつらは……！」

震える声で言うと、手にした拳銃をスザクたちに向けた。

「ちよっ、待ってくれニーナ、僕たちは」

スザクが言い終わる前に、シャーリーがスザクたちの前に出て両手を広げた。

「……………」

「この人たちは違うの……………」

「そう、ブリタニアの要請で……………」

ニーナはそう言ってスザクたちを値踏みするように睨めつけた。

「それでこの船、ガニメデに？」

「そう、僕たちも乗せていってくれないだろうか？」

「……………」

ニーナは考える。自分の考えていた方法だと、確実にユーフェミアを助けられるという保証はない。

ここはスザクを、彼らを利用するのも手かもしれない。

「……………いいわ。乗せていってあげる。でもその変わり、絶対にユーフェミアさまを助けて。絶対に……………」

「わかった。必ず救ってみせる、必ず僕が、この手で……………」

そう言ったスザクの顔を、ニーナは冷ややかに見つめた。

船は、その四日後に出発した。

船出の章（後書き）

体の節々が痛い。ダルイよお。

領主の章

船は、その四日後に出発した。ものの、それはニーナの造っていた船、ガニメデではなく、別の船であった。

時を遡ること三日前。

「どうして……」

ニーナは呆然と呟く。

どうやら、ニーナの船、ガニメデに搭載された兵器が起動しなかったらしい。

「でも、船は動くんだろう？」

ジノがそう言ってニーナの肩に手をやると、彼女はそれを振り払って、キツとジノを睨みつけた。

「それじゃ意味がないの！ 貴方たちが助けられなかったら、誰がユーフェミアさまを助けると思ってるの！？」

「僕たちが必ず助けてみせるから……」

スザクの言葉に、ニーナはジノからスザクへと視線を移す。

「上辺だけの言葉はやめて！ どうして命をかけて助けるって言えないの？ 私は違う。自分の命を捨ててもユーフェミアさまを助けてみせるわ！」

命をかけて、か。

スザクは自分にかけられた「生きる」というギアスのことを思う。そして、ユーフェミアが言った「生きて」という言葉も。

「ヒステリー……」

アーニヤは手にした携帯のカメラ機能で、ニーナの姿を撮影する。

「っ！ もういい、出てって！」

ニーナのものすごい剣幕に、スザクたちはその場をあとにするのだった。

「さて、振り出しに戻っちまったなあ」

ジノはそう言って市場で買った串焼きを頬張る。咀嚼し、幸せそうに鼻を鳴らすジノとは対照的に、スザクは真剣にこれからどうしたものと悩んでいた。

「どうしたものか……」

「あれ」

アーニヤがスザクの肩を叩き、前方を指さす。

「何だい？」

何かいいアイデアでもあったのかとスザクは視線を上げ、そして少しだけ泣きそうになった。

そこには、子供から玩具を取り上げようとしている玉城の姿が。

「いいからちよつとだけ貸せって！ 俺を誰だと思ってるやがんだ？ 黒の騎士団一のケン玉名人玉城様だぜっ！」

「で、どうする？」

ジノが手にした串を玉城へと向けた。

「僕が行く」

スザクがそう言って、疲れたように玉城へと向かっていた時だった。

「感心しないね」

横手から現れたのは、いかにも上辺だけで笑みを浮かべているような金髪碧眼の男、シュナイゼル・エル・ブリタニアであった。

「子供から玩具を取り上げるなんて、感心できることではないね」

「んだデメエ、これは借りてるだけアイタタタ……！」

玉城は後ろ手に捻り上げられると、地面へと組み伏せられる。

気づけば、彼らの周りには数人の屈強な男たちで囲まれていた。

「くそっ、またかよお……！」

シュナイゼルは玉城が落としたケン玉を拾うと、とられた子供に差し出す。

「さあ、受け取りたまえ」

「ありがとう、領主さま！」

子供はケン玉を受け取ると、シュナイゼルに手を振って去っていった。

「ん？　おや、君たちは」

シュナイゼルはスザクたちの姿に気づくと、笑みを深くするのだった。

領主の章（後書き）

仕事に行ったら熱が上がりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7962r/>

コードギアス ギアスクエスト

2011年6月26日18時02分発行